

日本 DMORT ニュース第 9 号 (2021 年 12 月)

【目次】

1. 理事長よりのメッセージ (令和 3 年 12 月)
2. 熱海土砂災害活動会員の所感
3. 災害医学会学生部会東北支部の勉強会をお手伝いして
4. 事務局からのお知らせ

#####

1. 理事長よりのメッセージ (令和 3 年 12 月)

(理事長：吉永和正)

令和 3 年もコロナで始まり、コロナから離脱できないままで年が終わろうとしています。日本 DMORT の活動も、昨年に続いて制限を受けたままでした。特に大きな影響を受けたのが大規模災害訓練と DMORT 養成研修会の開催で、いずれも実施できないままです。その一方で、DMORT の現場活動は積極的に取り組んでまいりました。

7 月に発生した「令和 3 年伊豆山土砂災害」に DMORT を派遣して、10 日間にわたり 11 名の会員、のべ 48 名が活動したことは「日本 DMORT ニュース第 8 号」でお伝えしたとおりです。この報告では全体の流れを中心に概要をお伝えしました。活動したメンバーからはそれぞれの立場、視点からいろいろの意見を頂きましたが、その中で種々の思いのあることも判明しました。活動メンバーから報告を頂きましたので、第 9 号でまとめて皆様にお伝えすることとしました。

12 月 17 日に大阪で火災事件により多数の死亡者が出たことはご存じの通りですが、ここにも DMORT 派遣を実施しました。日本 DMORT は令和 3 年 4 月より「大阪府被害者支援会議」の会員となっており、大阪府警察との連携が始まっていました。18 日に大阪府警からの要請を受けて、ただちに DMORT を派遣しました。医師 3 名、看護師 3 名で 2 家族の支援を実施しました。翌 19 日にも再度派要請があり看護師 2 名を派遣して 1 家族の支援を行ないました。事件に関係することであり、これ以上の詳細は警察との情報調整が必要となりますが、迅速に活動を実施できました。怒りと悲しみしか残らない事件ですが、私たちの活動がご家族支援の一助となることを願っています。

ウェブ研修会は令和 2 年 12 月 5 日に新潟大学との共催で開催されたオンラインセミナー以降、何もできていませんでしたが、令和 3 年 12 月 4 日に指宿南九州消防組合を対象としたウェブ研修を実施しました。全会員の皆様を対象に 11 月 17 日に参加募集をしましたので、概要はご存じと思います。参加者数は消防 19 名、日本 DMORT 会員 12 名でした。今回は問題提起からプログラムを

始めるといふ、従来とは異なる流れにしましたが、よい研修内容になったと考えています。別の機会に詳細はお知らせしたいと思ひます。

今年の漢字は「金」だそうですが医療関係者を対象とした今年の漢字（メドピア）では第1位が「禍」これに耐、忍、疫、感が続きます。来年（2022）に望む漢字では第1位が「明」次いで復、安、穩、新でした。来年は新しい展開ができることを願っていますので、皆様のご協力をお願いいたします。

2. 熱海土砂災害活動会員の所感

1) 「熱海市土砂災害」での遺族対応に当たる上での各関係機関との調整 (愛知県支部：新田 満、北川喜己)

2021年7月3日に静岡県熱海市伊豆山地区の逢初川で発生した大規模な土石流災害に日本DMORT（災害死亡者家族支援チーム）の初動メンバーとして出動させて頂きました。

愛知県警と締結した協定では、近隣県警との調整を依頼できることになっていて、これに基づいて静岡県警からの要請で日本DMORTの活動を行うことになりました。協定を結んでいない静岡県であり、まず愛知県支部メンバーが中心となり、日本DMORTの活動を説明し理解して頂く事から始めました。また遺族対応をするにあたり、役割分担など各関係機関との連携を図る必要がありました。静岡県警をはじめ熱海市役所、DMAT、DPATそれぞれに遺体安置所で活動を始めた事を伝え、活動内容のすり合わせを行う事から行いました。その中で、遺族だけでなく行方不明者の家族や、遺体安置所で対応に当たっている市役所職員のメンタルヘルスのニーズが必要なことを知り、その役割を我々が担当させて頂くこととなりました。

このようにして日本DMORTの活動に関して理解を得られ、かつ各関係機関と連携が図られたことにより、徐々に静岡県警と共に御遺体対面時をはじめ、遺族対応に全般的に携わることができるようになりました。今回の活動で、しっかりと遺族対応を行うためにはまず、我々の考えを現場の方々にきちんと伝え、実際の活動を理解して頂く事の重要性を感じました。今後も日本DMORTの活動を多くの人に知っていただける様に活動をしていきたいと思ひました。

2) 熱海土砂災害活動報告

(理事：河野智子)

私は、7月13日～18日まで6日間活動させて頂きました



(この箇所の記載は被災者の方のプライバシー保護のため、ホームページ公開版では省いております)



そして、夜 22 時頃宿舎に戻ってきたときの写真です。われわれ日本 DMORT が、遺体安置所に入っ

すでに 9 日目の夜のことでした。

なかなか進まない現場の捜索活動を、祈る思いで待ちながら、遺体安置所で活動されておられる行政の方々や葬儀社の方々への声かけに努めて来た我々にとっては、心に残るご遺族との関わりとなりました。辛くかける言葉がない時間ではありましたが、ご遺族のお言葉を胸に刻みながら宿舎に戻ってきた時に、愛知県支部長の北川先生と救急救命士の新田さんが、私達を笑顔で迎え入れてくれ、大きな心で包んでくださいました。どんなに、4 人が癒されたことでしょうか。チームのありがたさをこんなに感じたことは今までになかった瞬間でした。救援者のこころのケアが、何よりも大切であるとする北川先生のこころ温かい思いが、本当に伝わってきました。

今回の派遣は、今までになく 11 名が派遣され、DMORT メンバーの支え合いを実感しました。そして、活動の度に多くの学びをいただき自らも成長できる喜びをかみしめています。

3) 熱海土石流の DMORT 活動を終えて今思うこと

(聖隷浜松病院 救命救急センターER 看護師：別所輝哉)

初夏の長雨から、想像もしていなかった災害より早くも半年が経ちました。メディアも訴訟・責任問題に焦点があたる一方、未だに 1 人、冷たい土の中で

見つけてもらうことを待たれている方とそこをご家族を思うと、何とも言えない虚しさを感じています。同じ県にありながら横に長い静岡の東部と西部で、当時のコロナ事情も相まって、おいそれと活動に参加できる状況でなかった当時の歯痒さを思い出します。

私の携帯には発災後、早い段階より現地で活動していた DMORT 研修を修了した DMAT・DPAT メンバーから、現地の DMORT のニーズと「いつ来るのか」と問い合わせが何度も入っていました。実際に私が熱海入りできたのは発災後 10 日を過ぎた遺体安置所でしたが、なんとも重苦しく、館内を移動するにも憚られる雰囲気であったことを覚えています。

熱海入りした当日にはご遺体はなく館内で待ちながら情報収集と会議の日々で、端末の画面と向き合いながら救出現場を思い、控室から祈ることしかできない自分の憤りを押し殺していました。

(この箇所の記載は被災者の方のプライバシー保護のため、ホームページ公開版では省いております)

わかっている事実のみを伝え、ご家族の抱える思いをそのままに受け入れることは病院で何度も繰り返されてきた事でしたが、被災状況が見えにくく災害現場では伝えられることが少ないという難しさも今回感じました。

私の活動期間に限ったことではないと思いますが、警察が管轄する別の指示系統で動く DMORT を快く迎え入れ、情報共有してくださった保健医療福祉調整会議の DMAT・DPAT メンバーには感謝に絶えません。微力ではありますが県内で DMORT を推し進めてきたことが、このような形でひとつ活動に繋がったことを嬉しく思うとともに、吉永理事長はじめ愛知支部が調整本部に足を運ばれたことの重要性は今回明らかであったと考えます。DMORT が活動をはじめる前、安置所には多い日で 7 体のご遺体が安置されていたと聞きました。そのような混乱のなかでご家族の対応をされた、県警はじめ所内職員の方のお気持ちは察して余りあるものです。支援者支援の必要性も感じるころですが、そのためにもまず県警との早期事前協定締結を願っています。

熱海の活動を思い返し、何気なく過ぎ行く日常が決して当たり前でないことを感じつつ、最後の 1 人になってしまった方の 1 日も早い発見を祈るばかりです。最後に被災県民のひとりとして、ご支援と活動へのご理解をいただいたすべての方に感謝を申し上げます。

(写真は遺体安置所内の DMORT 待機室から災害現場方面を臨んだ一枚)



4) 2021 年 7 月 3 日 豪雨熱海土石流災害死亡者支援活動報告

(業務調整員：浅田恒生)

私は、7月9日～18日の活動当初から最終日までの10日間の支援活動をさせて頂きました。

発災から河野理事と熱海土石流災害での行方不明者多数の件で、派遣があるのか等LINEを通じて話をさせてもらいました。その後、吉永理事長からメールにより日本DMORTの緊急時MLで参加者の募集があり、派遣が決まれば、愛知県支部中心に活動となる旨を知りました。私は、吉永理事長に9日～20日まで出動可能と連絡し、7月9日(金)11時に現地(ご遺体安置場)に直接入ることになりました。現地までの移動手段として車両で移動するため所管の警察署に出向き、臨時緊急通行許可証の申請をしました(現地まで約9時間～10時間かかる予定)。今回も日本DMORTメンバーからの後方支援として、何かと情報を提供して頂き、感謝しております。

9日の10時頃に南熱海マリーホールに到着した際、特に、規制線の入り口付近に報道陣が陣取っておられたのが驚きでした(今までの災害活動では、報道関係者おられなかった)。9日から18日までの活動については、静岡県警の署員の皆様には何かとご教授を賜り、活動の場を頂き感謝です(静岡県警の方々との毎日の顔の見える支援活動は、良かったと思っております)。日本DMORTの控室を作っていただき、その場で、県警からの注意事項を踏まえて誓約書に全員がサインを行い提出。

現在、大ホールに安置されている7体のご遺体に対して、お線香と手を合わ

させていただきたい旨を静岡県警の当日の指揮者をお願いして了承を得たため、安置場の焼香台で手を合わさせていただきました。大ホール安置場では、7体のご遺体が納棺されていて、お花がお供えされていました。ご遺体安置場の環境や換気も悪い状態でした。

今回は、ご家族様の控室がなかった為、県警の指揮者のご理解を得て、日本DMORT控室の隣に、ご家族控室を開設する事ができ、その際に、熱海市の職員と色々なお話ができ、機材を借用出来たのがその後のためにも良かったと思っております。支援隊員の基盤となる宿泊施設については、熊本の場合は、ご遺体安置場での寝泊りが可能でしたが、今回は熱海市の施設なので静岡県警も引き上げて翌日の早朝に来られるので、愛知県支部チームと共に引き上げを余儀なくされました。

今回は、なかなかご家族様に対応できないなか、静岡県警と支援メンバーの努力により、少し対応が可能となりました。ご家族様の面談に立ち合わせていただき、色々とお話しをさせていただき、微力ではありますが、お役にたてたのではないかと思っております（未だ最後まで、全てのご家族様に対して、支援が出来なかったことが心残りであります）。今回私は、ご家族様のご理解を得て、出棺の際、霊柩車までご家族の気持ちになりながら棺を持たせていただいた事に対して感謝いたしております。

今回は、初の11人ものメンバー派遣があり、心強く、チームのありがたさを感じるとともに、愛知県支部のチームの皆様や愛知県支部後方支援の皆様の心優しさが心にしみました（今回も、全ての日本DMORTメンバーの方々の後方支援にも感謝です）。私は、支援活動に派遣をしてもらったたびに、多くの学びをさせていただき、感謝いたしております。

3. 災害医学会学生部会東北支部の勉強会をお手伝いして

（副理事長：村上典子）

2021年8月14日、東北大学病院高度救命救急センターの藤田基生先生からの誘いで、災害医学会学生部会東北支部（東北DMAS）の勉強会のお手伝いをオンライン参加でさせていただきました。私と学生部会のご縁としては、関西部会の学生さんに他学会の災害企画のお手伝いをお願いしたり、2020年2月に神戸で開催された第25回日本災害医学会の会期中の学生部会フォーラムで講演させていただいたりなどがありました。藤田先生によると「東北DMASは大学の壁を越えた医療系の学生で作られた組織で130名程度の会員がおり、災害時にDMAT等の医療チーム活動をサポートすることを目標に勉強会を重ねている」とのことです。なお藤田先生とDMORTのご縁は、2016年（まだ一般社団法人になる前

の研究会の時)に、「G7 財務大臣中央銀行総裁会議」が仙台であった際に、医療対応の一環として支援体制を構築するのに「有事(死亡者発生事案)にDMORTとして動けるようにしてほしい」という依頼を受け、県庁や宮城県警とも連絡をとり、仙台在住のDMORT養成研修会受講済みの方に待機いただく準備をしたことがありました(私もその期間にたまたま学会で仙台に滞在中でしたので待機)。当然ながらDMORTの出番はなかったわけですが、このお役目をいただいたことは大変ありがたく思っておりました。

今回DMORTに白羽の矢が立ったのは、局地災害のシミュレーションの中で「黒タグの扱い、家族対応」をテーマの一つとして取り上げたいという希望が学生さん(医学生、看護学生、救急救命士学生など)からあったとのこと。勉強会は2日にわたって開催されたのですが、私が関わった初日のプログラムは以下の通りです(13~17時の約4時間)。

*アイスブレイク

*グループワーク①: トリアージ(START法)

*グループワーク②: 黒タグ患者の家族対応ロールプレイ

*ふりかえり

*グループワーク③: 黒タグに関するディベート

*ふりかえり

*村上の講義「黒タグにまつわる心のケアと救援者のストレス」

勉強会自体がZoomによるもので、グループワークもZoomの「ブレイクアウトルーム」機能が用いられており、いろいろな部屋をのぞかせてもらいました。黒タグ遺族の背景、設定などは事前うちあわせで私からもアドバイスさせていただきましたが、学生さんが主体的に取り組んでおられました。現場経験のある医師・看護師であっても黒タグ家族への対応は大変難しいと思いますし、オンライン研修ですので、遺族支援に重要なスキンシップや「黙って寄り添う」ということもできず、様々な制約がありましたが、果敢に取り組んでくださったことに敬意を表します。

また大変ユニークで私にとっても刺激的だったのは「ディベート」でした。このテーマも事前うちあわせで私も意見を出させていただきましたが、学生さんが決めてくれました。以下の4つです。

- 1) 救出後、医療者の目の前で85歳の女性(クラッシュ症候群)と3歳の男児(脳挫傷)が心停止になった。他にも多くの赤傷病者がおり、二人同時に心肺蘇生は無理。「優先されるのは子どもである」
- 2) ○○市で19人が刃物で切りつけられる事件があった。「加害者が赤、被害者(同僚のDMAT隊員)が心肺停止状態の時に優先されるのは加害者である」
- 3) 「黒タグをつけるのは医療従事者なら誰でもおこなってよい」

4) 「災害時に死者や安否不明者の氏名や住所、年齢などの発表は積極的におこなうべきである」

特に 1) 2) についてはバックグラウンドとして詳細な設定もあり、受講者には事前にテーマが教えられ、事前学習もできるようにした上でのディベートですので、見応えがありました。終了後は私からもフィードバックをさせていただき、「正解のない難しい課題ばかりだけど、こうやって真剣に考えることに大変意義があったと思う」と伝えました。

そして、最後に村上からの講義「黒タグにまつわる心のケアと救援者のストレス」を 40 分させていただき、非常に密度の濃い勉強会を終えました。

以下はこのニュース原稿を書くにあたって、東北 DMAS 第 1 回研修会代表の橋本拓人さん（救急救命科学生）が寄せてくれた「この勉強会で黒タグに関して取り上げようと思ったきっかけ」です。

<「トリアージ」これは多数の傷病者が発生した際に、最大多数の救命を目的に傷病者の状態に応じて治療や搬送の優先順位をつける行為を意味します。福知山線脱線事故や秋葉原殺傷事件などの多数傷病者事案で実際に用いられ、しばしば報道で黒タグにまつわる問題が取り上げられました。また私は、事故のトリアージを担当した知人をその惨事ストレス亡くすという経験もしました。災害医療を学ぶ学生として、トリアージや黒タグが果たす役割を理解出来るからこそ、その裏に潜む救援者のストレスや災害遺族の心のケアなどを取り上げようとして企画しました。>

私は普段大学病院に勤めているわけでないので、学生さんと接する機会はほとんどありませんが、たまに接すると、初心に戻るといえるか、身の引き締まる思いがします。今回、貴重な機会を与えていただき、藤田先生、東北 DMAS の皆様に心から感謝申し上げます。

4. 事務局からのお知らせ

2021 年 11 月末現在での会員状況をお知らせします。理事 8 名、正会員 16 名、登録会員 171 名、賛助会員 4 名（団体）です。

基本的には入会いただける方は「登録会員」となります（会費 3000 円）。正会員は従来の世話人や、今までに訓練に参加くださったり、研修会のタスクをして下さったり、積極的に運営に関わって下さる意思のある方などで、理事から推薦させていただいております（会費 1 万円）。

当法人の会計年度は 1～12 月ですので、会費納入をよろしくお願ひします。ご自身が会費納入をしているかが不明の方は事務局までお問い合わせください。訓練参加やタスク参加など、会員限定の特典もありますので、是非引き続き

会員になっていただけるよう、よろしくお願いいたします。なお 2 年間会費が未納の方は退会となります。

【理事名簿】

理事長：吉永和正（医療法人協和会副理事長）

副理事長：村上典子（神戸赤十字病院心療内科部長）

理事：

北川喜己（名古屋掖済会病院副院長）・愛知県支部長

久保山一敏（京都橘大学健康科学部教授）

黒川雅代子（龍谷大学短期大学部教授）

河野智子（京都第一赤十字病院看護部）

長崎 靖（兵庫県監察医務室）

山崎達枝（長岡崇徳大学看護学部看護学科准教授）

監事：

鶴飼卓（兵庫県災害医療センター顧問）

【事務局所在地】

〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-15-1 協和マリナホスピタル内

電話：0798-32-1112（代） F A X：0798-32-1222

<http://dmort.jp>

E-mail：information@dmort.jp

<編集後記>

前回のニュース 8 号（9 月発行）の吉永理事長の熱海土砂災害経過報告に続き、今回活動したメンバーの所感も掲載させていただきました。われわれの活動は遺族支援という非常にデリケートな性質上、なかなか詳細をお伝えすることもできないのが少し残念です。今回の原稿中もご遺族自身を読めば、自分のことだとわかる記載もありますが、会員の皆様には知っていただきたく、このまま配布しますが、ホームページ上で公開する際に変更したいと考えています。ですので、今回のニュースの取り扱いにはご注意ください（変更済みです）。

次年度は会員向けのオンライン勉強会なども計画していますし、コロナ禍が落ち着いたら対面での養成研修会も再開したいと思っています。どうか今後とも会員として、当法人を支えていただきたく、よろしくお願いいたします。

（編集担当：村上典子）